

IFRS news

IASBがリースの単一モデルを引き続き維持

October 2014

IASBは、2015年に見込まれる最終基準に向けて進めている

国際会計基準審議会 (IASB) は、なぜリースに関する再審議を1か月間休止したのでしょうか。これはIASBがリースの単一モデルで検討を進めようとしている有力な証拠であると推測する人がいるかもしれません。そのことは明白であるとする人もいれば、依然として懐疑的な見方をする人もいます。

明らかなことは、IASBがアウトリーチ活動に重点を置いていることです。IASBが提案した「単一の」会計モデルは、長期にわたるリースに関する議論の論点となってきました。IASBのメンバーは、2014年10月、欧州財務報告諮問グループ (EFRAG) および会計基準アドバイザー・フォーラム (ASAF) と会合を行い、特にこのリースに関するIASBの提案について議論しました。

現状は？

IASBは、リースに関して、単一モデルを採用することで落ち着いたかのように見えます。つまり、借手はすべてのリースをファイナンス・リース (タイプAのリース) として会計処理するというものです。その結果、貸借対照表には資産と負債が計上され、また、最も重要な点として、前倒しの費用処理が行われることとなります。

このモデルは、2009年にIASBが公表した最初の提案に類似していますが、それに対するフィードバックは決して肯定的なものではありませんでした。それ以来、IASBはさまざまな方向を検討し、FASBとのコンバージェンスを模索し、そして現在、出発点に戻りました。今回は、その立場を維持することが決定されたように見えます。

IASB副議長のイアン・マッキントッシュ氏は、2014年6月、「リース基準は、当該基準によって著しい影響を受ける経済セクターにおいて、企業の真のレバレッジを測る上で大いに必要となる考察をもたらすものである」と述べました¹。

単一モデルのもう一つの大きな利点は、会計上の取扱いにおいて裁量が生じないことです。すべてのリースが同様に扱われることになるため、このモデルは公平かつ概念的に健全なモデルであると考えられます。それでは、なぜ多くの批判を受けているのでしょうか。それは、定額法が経済的な実態をより良く反映していると多くの人が考えている場合 (例えば、不動産のリース) であっても、このモデルによると前倒しのリース費用の認識が生じてしまうことが主な要因と考えられます。多くの人が、国際会計基準 (IAS) 第17号に類似したFASBのモデルを引き続き支持しています。

最終的に、世界中が貸借対照表上でのリースの認識や前倒しの費用認識の受入れに前向きになったとしても、課題は残ります。特に、比較的少額なリースから構成される多額のポートフォリオが課題となります。

¹ 2014年6月23日ロンドンで行われたIFRS財団カンファレンスでのイアン・マッキントッシュ氏によるスピーチより

今後は？

IASBが単一モデルで検討を進める予定の場合、いくつかの実務上の論点を解決する必要があるといえます。それらを解決しなければ、異議が生じる可能性が依然として残ることになります。現在既に不満は生じており、追加の議論を行わなければEFRAGがEUでの承認を支持する可能性は低いといえます。

最初の論点として、サービスとリースとの区分の方法があります。現行の実務において、オペレーティング・リースの会計処理は、サービス契約に係る会計処理とほぼ同じです。したがって、これらの区分は十分に検証されてきてはいません。多くの取決めが、サービスとリースの両方の要素を持っています。これをどのように会計モデルに反映すべきかについて、議論が行われています。

またIASBは、「少額資産」のリースに関する議論を引き続き行っています。その議論では、貸借対照表に少額資産のリースを計上する必要はないということが常に意図されています。ただし、この情報を提供することの便益はコストを上回るものではなく、免除規定の内容と範囲の策定は困難となる可能性があります。